

7/31 木曜

「自衛官戦死に備えよ」

元陸幕長 睽国神社「復活」唱える

陸上自衛隊の元制服組トップ、自衛官では國家の命運、国民の施設としての靖国神社を復活が、自衛官の戦死に備えて靖国神社を復活するため戦意意識が格段に違う」などとし、され、「一命を捧げた」(戦死して、「近い将来國を守るために戦」として「復活」させよ」公然と死する自衛官が生起する可能性を主張している」とが、改憲右翼は否定できない。我が国は「一命を捧げる覚悟のある自衛官たちを撃てるつもりなの」で分かりました。◆関連②面の処遇にこだわるつもりなのが放棄されているのは「誠に残念」だとしつつ、「国家の慰靈

か」と問い合わせています。

火箱芳文^{元陸上幕僚長}は『日本風吹』8月号の「國家の慰靈道悼施設としての靖国神社の復活を願う」と題する記事で、軍事力の抜本的強化を図る安保3文書の閣議決定を「大いに評価しつつ、自衛隊は國內法的には軍隊ではなく、「田軍人とい」として、「國家の慰靈

施設」としての靖国神社を復活の指揮下で相手國を攻撃する体制が強化されるもとで、戦死した自衛官をどう扱うのかという問題が切迫した課題となつてゐる」とが、火箱氏の主張が自衛官が「戦死」した場合、「筆者ならば靖国神社に祀ってほしいもうかがい知る」ことができま

自衛官の戦死「対処」口実に

岸田政権が閣議決定しています。

憲法違反の敵基地攻撃能を保有し、日本が武力を保有していなくてはなりません。その戦死者への「処遇」を口実に、戦争神社としての靖国神社の復権を推し進める狙いをあからさまに語っているのが、1面所報の火箱芳文(元陸上幕僚長の主張です)です。その戦死者への「処遇」を口実に、戦争神社としての靖国神社の復権を推し進める狙いをあからさまに語っているのが、1面所報の火箱芳文(元陸上幕僚長の主張です)です。

"靖国復活"の狙い

「戦死する自衛官が生起する可能性は否定できない」と極めて正直に語っています。

安倍晋三元首相は在任中の2013年12月26日、靖国神社を参拝した際の談話で、「一度と再び戦争の惨禍に入々が苦しむことのない時代をつくるとの決意」を伝えています。

自衛官の戦死は絵空事ではなく、もはやいつ起きても不思議ではありません。火箱元陸上幕僚長が

靖国神社があたかも平和を守る施設であるかのようにいふべきではありません。靖国神社へ

の集団参拝などを行うことは、しかし、そもそも靖国神社は戦前、戦死者を「英靈」「尊神」としてまつることで国民を戦争に駆り立て、戦後は過去の侵略戦争を「正義の戦争」として正当化してきた歴史を隠め、さらに戦争遺族を慰め、さらには戦争施設です。その施設への参拝で「戦争のない時代」をつくる決意を世界に伝える施設——そんな戦前と同じ役割を靖国神社に再び与えたいのが狙われています。

はめがありません。(林信誠)